

---

拮抗する「笑談」<sup>じょうだん</sup>と「真面目」さの言語ゲーム  
夏目漱石『心』における生成される〈今〉

---

KWAK Dong Kon

郭 東坤

## 1. 新聞連載『心』における空白

本論文では、新聞連載で小説を読む場合を想定しながら夏目漱石の長編小説『心』を分析してみたい。新聞連載小説としての『心』は、一九一四年四月二十日から『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に連載が開始され、八月十一日と十七日にそれぞれ連載終了を迎えた。連載の初回を見ると絵文字の中に記された「心<sup>こころ</sup>」という題名の下に「漱石」と作者名が記され、その左に「先生の遺書」という副題が付けられている。連載回数である「(一)」はその左に記され、その左の行から始まる本文は「私は其人を常に先生と呼んでゐた」と「私」という書き手による手記形式で綴られている。従って新聞連載小説『心』の読者は、「私」という青年が執筆した手記「先生の遺書」の読者でもある。

新聞連載で『心』を読む読者は、ただちにその副題でもある「先生の遺書」の読者となるわけではない。作者「漱石」は、紙上で「連載予告」で「今度は短編をいくつか書いて見たい」と言い「一つ一つには違つた名を付けていく」執筆方針を公開した上で、「予告の必要上全体の題」を『心』と致して置くと断っている<sup>(1)</sup>。だから「連載予告」を読んだ多数の読者は、その次に続く「短編」を期待しながら『心』の「短編」の「一つ」である「先生の遺書」の読者となる。しかし、次の引用箇所で確かめられるように、その次の「短編」は書かれなかった。従って『心』の読者は、「漱石」という作家の契約違反によって「先生の遺書」の読者となる。連載最終回の終わりの部分を引用してみよう。

私は私の過去を善悪とともに他の参考<sup>ひと</sup>に供する積です。然し妻<sup>さい</sup>だけはたつた一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何も知らせたくないので。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なので、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい。」(終り)(百一一)[括弧の中の数字は連載回数を指す、本文の引用は『東京朝日新聞』による、傍線による強調は引用者による、以下同様]

傍線で強調した部分には、「先生」、「私」、「漱石」という三人の表記行為が重ねられている。まず、遺書の書き手「先生」による句点で本文である遺書が終わる。次には、手記「先生の遺書」の中に「先生」の遺書を鍵括弧で括りながら書き写した書き手「私」が、鍵括弧を閉

---

(1) 夏目漱石「小説予告」『東京朝日新聞』(一九一四年四月一八日付)。

じ、遺書の引用を終える。最後には、鍵括弧の外側に「(終り)」と記した作者「漱石」が『心』の連載終了を告げている。このように三段階に分けられた表記行為は、同じく三段階の読書行為を構成する。

まず、「先生」が書き記した遺書である本文によって読者の位置が定められる。「あなた」を宛先にする手紙である遺書は、「他の参考に供する積」だという「先生」の遺志に従う形で公表されたため、その「他」に当たる読者もそれを読むことができる。ここで読者は、単に「あなた」だけに宛てられた手紙を覗いてみるのではなく、書き手を「先生」と呼び、その弟子を以て任ずる本文中の「あなた」こと「私」の公表行為によって、自らを「他」の立場に置き、「先生」の遺書の読者となる。「先生」と「私」の間で「あなた限りに打ち明けられた私の秘密」である遺書を「他」に公表することが「私」にすべて任されている以上、読者は「先生」と「私」の間のこのうえなく信頼し合う師弟関係を解釈枠組として想定することができる。但し「私」が「先生」の遺志に従うと想定される以上、遺書は「先生」の「妻」こと「静」の死後に公表されていなければならない。

次に読者は、鍵括弧が閉じられていることに注目するだろう。その鍵括弧が開かれたのは、「私はごう／＼鳴る三等列車の中で、又<sup>たもと</sup>袂から先生の手紙を出して、漸く始めから仕舞迄眼を通した」(五四)と記された手記部分の最後の箇所次である。鍵括弧が閉じられるこの箇所で終わるのは、遺書の「初めから仕舞迄眼を通した」「私」の読む行為であると同時に、鍵括弧を括り「先生」の遺書の引用を終えた「私」の手記執筆でもある。だが、「三等列車」の中で遺書を読んだ当時の「私」と、その遺書を書き写して引用した手記「先生の遺書」の執筆を終えた「今」の「私」の間には、決して無視すべからざる質的な差異があると言わざるを得ない。「私」という青年が遺書の読み手から遺書を引用した手記の書き手に変貌を遂げていることだけでも、その差異は充分に証明できよう。しかし、その差異がもたらされた経緯に当たる出来事が起こるべき「三等列車」から降りてからの時間は、手記のどこにも書き記されていない。新聞連載『心』の「連載予告」を読み、連作短編を予期していた読者からすれば、その空白は次の「短編」で埋められるべきものであろう。

しかし、読者は「(終り)」という作家による表記行為——もちろんこの表記は新聞紙面による慣習的なものとも言えるが、小説そのものを終えているのはあくまでも作家である——によって次の「短編」のない「先生の遺書」だけの読者として位置づけられる。すると、遺書

を読み終えた当時の「私」が、遺書を引用して手記を執筆した書き手とならざるを得なかった経緯は、空白として残される。もちろん単行本として小説を読む場合にも、同様の空白は生じるだろう。だが、新聞紙面での毎回の連載に表記される「先生の遺書」という副題が生成させる意味作用を見逃すわけにいかない。すなわち、毎回の連載で「先生の遺書」という副題を確かめる新聞連載の読者は、まだ遺書が存在が言及されていない手記部分を読むときから、すでに「先生」の遺書の登場を予期せざるを得ないのだ。では、この予期は、どんな意味を形成させるのか。

手記部分に当たる連載十二回、「私」は「先生と知合ひになつてから先生の亡くなる迄に、私は随分色々の問題で先生の思想や情操に触れて見たが、結婚当時の状況に就いては、殆んど何ものも聞き得なかつた」と書き記している。当時「花やかなロマンスの存在を仮定」していたために、「結婚当時の状況」の裏にある「恐ろしい悲劇」を見逃してしまったと告白した「私」は「今此悲劇に就いて何事も語らない」と記す。さらに「私」は、「たゞ私の記憶に残つた事がある」と断り、「先生」が「恋は罪惡ですよ（同）」と言って「雑司ヶ谷の墓地に埋まつてゐる友人の墓」（十三）の話を急いで切り上げた場面を詳細に記述する。たとえ「先生」の遺書が存在はまだ記されていないとはいえ、読者には「私」がその「友人の墓」と関わる「恐ろしい悲劇」についての遺書を「私」がすでに読んだことを「先生の遺書」という副題から推理することができる。だとすれば、「三等列車」の中で初めて遺書を読み終えた以降の「私」が、複数回にわたって遺書を読み返してきた者であることが仄めかされているのだ。

私の仮定は果たして誤らなかつた。けれども私はたゞ恋の半面丈を想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持つてゐた。さうして其悲劇の何んなに先生取つて見慘なものであるかは相手の奥さんに丸で知れてゐなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにゐる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、先づ自分の生命を破壊して仕舞つた。（十二）

ここで「静」こと「奥さんは今でもそれを知らずにゐる」と書いた「私」は、「それ」すなわち「恐ろしい悲劇」が「相手の奥さんには丸で知れてゐなかつた」、「先生はそれを奥さん

に隠して死んだ」と書き記している。つまり、「先生の遺書」を執筆している「今でも」「静」は、「先生」の遺書を読んでいないのが明らかなのだ。その意味で「私」は「先生」の遺書が課した禁を守ってきたのだ。ここで、「それ」を「静」こと「奥さんに隠して死んだ」「先生」の自殺が、「奥さんの幸福を破壊する前に、先づ自分の生命を破壊して仕舞った」と記述されていることに注目してみたい。それは、「妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたい」という「先生」の遺書の終わりにおける記述と響き合いながら一つの解釈枠組を形成させるのだ。「静」が「先生」の遺書を読むことで、彼女自身の「幸福を破壊」しかねないというのがそれである。

多数の先行研究がこの解釈を支持している。例えば、「静」は「先生」の遺書を読むことで「自分の今迄の先生との関わりの全てを洗いざらい思いだして考え込んだ」挙句「一切の人間の連帯が断ち切られた空漠たる虚無の空間」で「死ぬしかない」<sup>(2)</sup>、若しくは「己れの過去に対して持つ記憶」(百十)の再検討を強いるために、遺書を読むことそれ自体が「危険な作業」である<sup>(3)</sup>とするなど、先行研究史における多くの論文には、遺書を読むことだけで「静」は後追い自殺を遂げてしまいかねないという結論に迫り着く趣きもある。さらにこの傾向には、「資産もあり前途も有望らしく思える青年を捕まえるために、ダシに使った愚鈍な青年を死に至らしめたことを、別段罪とも思っていない」<sup>(4)</sup>「静」が、実は「先生」の「自殺しなければならない」「Kへの罪」の「半分」<sup>(5)</sup>を負うべき「策略家」だとする認識が共有されている。「先生」の遺書が「静」自身の「策略家として」の「像」を「決定的に喚起」する<sup>(6)</sup>ものである以上、遺書を読むことは彼女自身の「罪」を問うてしまいかねない。だから、遺書の秘匿を命じた「先生」は「妻を思うが故に、結局一切のことを隠したまま死んでゆく」のであり、それは「静」を「自己破滅から救おうとした」「優しさ」<sup>(7)</sup>の至りだというふうに、遺書秘匿を命じた「先生」の遺書は正当化されていく。これが言わば「静」「策略家」説の概要であると言える。

しかし「静」の記憶は、果たして「純白」だと言えるだろうか。「私」の手記で「いや考へたんぢやない。遣つたんです。遣つた後で驚いたんです。さうして非常に怖くなつたんです」(十四)と「友人の墓」に関わる話に迫り着こうとする「先生」の話を、「襖の影」で「あなた、

---

(2) 西垣勉『『こゝろ』覚書』『日本文学』(一九七一年九月)。(7) 秋山公男『『こゝろ』の死の論理—我執との相関—』『国語と国文学』(一九八二年二月)。

(3) 高田知波『『こゝろ』の話法』『日本の文学』(一九九〇年一二月)。

(4) 小谷野敦「夏目漱石におけるファミリー・ロマンス」『批評空間』(一九九二年一月)。

(5) 石原千秋「『こゝろ』のオイディプス—反転する語り—」『成城国文学』(第一号、一九八五年三月)。

(6) 石原千秋、前掲論文。

あなた」と呼びかけて止めたのが、他ならぬ「静」であることが書き記されている<sup>(8)</sup>。又、初めて訪ねてきた「私」に「十分になるか、ならない」前に「雑司ヶ谷の墓地」(四)に「先生」が出かけたと告げ、東京で初めて再会した「私」を「友人の墓」についての「秘密」を探る探偵のように振る舞わせたのも、実は「静」である<sup>(9)</sup>。たとえ遺書を読んでいないにせよ、「静」が「それ」についてまったく無知であるとはとても言いにくいのだ。もちろんこのような「静」の「それ」への認知は「策略家」説をより強化してしまいかねないものであるかも知れない。この問題については次節で追って考察しよう。

## 2. 「主人」と「食客」の言語ゲーム

本節では、「静」を「策略家」とみなす先行研究の原型にある「笑ひ」の問題に注目する。先行研究は、「静」が「笑ひ」で「先生を不安がらせ苦しめた」にも拘わらず、「その罪深さや虚偽性に気付かず、かえって生きながらえている」<sup>(10)</sup>と主張する。この主張に従うならば、遺書を読んだ「静」は、自らの「笑ひ」の「虚偽性」を「策略家」としての「罪」として背負わなければならない。ここで注意すべきは、以上のように「静」を「策略家」に見なせる根拠を提供しているのが、他ならぬ「先生」の遺書であることである。そして「先生」の遺書が公表されている以上、存命中の「静」がその読者になる可能性は当然ある。だが、「私」が「先生」の遺書を引用した「先生の遺書」を執筆している以上、「静」が読むことになるのは、「先生」の遺書ならぬ「先生の遺書」である。以下では、「笑ひ」の問題を中心に、決して「純白」ではない「記憶」の持ち主である「静」と「今」まで遺書を秘匿してきた「私」の間の語られていない空白の中にはどのような言語ゲームが生成されてくるのかという問題について考えていきたい。

かつて三好行雄は、「先生」とその「選ばれた読者」である「私」の間を「至福にみちた関係」<sup>(11)</sup>と評した。遺書の書き手としての「先生」は、「私は何千万とある日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたい」と、宛先としての「私」を遺書の第一読者として特権化する。そして「あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから」とその理由

---

(8) 篠崎美生子は、「静が、先生の変化にKや自分が 年秋号)。

関わっている (少なくとも先生の意識の中では (10) 寺田健「御嬢さんの笑い—漱石『こゝろ』の一  
そうである) ことに気づいていないと考えにくい」 視点—」『日本文学』(一九八〇年七月)。

と指摘している。『日本近代文学』(一九九九年 (11) 三好行雄「『こゝろ』鑑賞」『鑑賞日本現代文学5  
五月)。 夏目漱石』(一九八四年三月)。

(9) 小森陽一は、「私」の「探偵行為の背後」に「先生」が「妻の影をただちに意識化している」と指摘している。「『私』という〈他者〉性—『心』をめぐるオートクリティック」(『文学』一九九二

も述べる（五六）。つまり、「人生」の「教訓」を伝授し伝授される師弟とも言える二人の男の関係は、「真面目」さによって担保される言語ゲームの規則が共有されていると言えるのだ。

一方、「静」「策略家」説を批判した押野武志は、『『静』』にとって恋愛はロマンではなく現実との関係を取り結ぶための技術であると述べ、「ロマン」的な恋愛主義者である男性同士の「言語ゲームを共有していない他者」とであると指摘する<sup>(12)</sup>。では、「静」が夫である「先生」から遺書の読者として選ばれるどころか、死ぬまで読者になることを禁じられたのは、男同士の「真面目」さをめぐる言語ゲームの規則を共有しない他者であると言い換えてみることでできよう。そして「真面目」さを持たない「静」の言語ゲームを特徴づける「笑ひ」は、すでにみたように、先行研究が彼女を「策略家」とする根拠でもある。

本論文では、以上のような理由で「笑ひ」を「真面目」さに対峙する言語ゲームとして捉えてみたい。しかし、両方を単に性差による二項対立に還元してはならない。「先生」と「静」の「結婚の奥に横たはる花やかなロマンスの存在を仮定して」、その「裏」にある「恐ろしい悲劇」（十二）に見逃したと書いている「私」が、手記を執筆している「今」でもかつてと同様な恋愛主義者であるとはとても言えないからである。本節から次節にわたり、「静」策略家説の根底にある「笑ひ」と、その「笑ひ」を誘発するための発話行為である「笑談<sup>じょうだん</sup>」に注目し、それが「真面目」さをめぐる言語ゲームといかに多様な形で錯綜しながら現れるのか、「先生の遺書」の分析を通じて明らかにしたい。本節ではまず、「先生」による遺書の言説を分析し、若き時代の「静」の「笑ひ」と「笑談」について検討してみよう。

若き時代の「静」について考えるとき、まず遺書の中に彼女の声を直接話法で再現したのが「御勉強」「御帰り」「はい」の三ヶ所に過ぎない点を指摘して置かねばなるまい。追って考察するが、手記の部分には「静」の対話が数多く再現されている。それを読んだ読者には、若き時代の「静」（以下「御嬢さん」と記す）を殆ど発話主体たらしめていないのが「先生」の遺書に見られる顕著な特徴であることが分かる。とはいえ、「御嬢さん」が実際に何も言わないわけではない。むしろ「日本の慣習」からすれば「日本の若い女」も「相手に気兼ねなく思つた通りを遠慮せずに口にする勇氣に乏しいもの」（八八）だという「当時」の「先生」の思い込みが、遺書を書いている「今」も続いているからこそ、「御嬢さん」の声と言葉が奪い去られてしまうのだ。

---

(12) 押野武志『『静』に声はあるのか—『こゝろ』における抑圧の構造—』『文学』（一九九二年一〇月）。

自分の意思を語ることができない存在である「日本の若い女」としての「御嬢さん」の声の不在を代補するのは、彼女の「笑ひ」と「笑談」である。「奥さん」と下女が留守なのに「御嬢さん」がKの部屋で話しているのを見た「先生」が「何か急用でも出来たのか」と問い詰めると、「御嬢さん」は「たゞ笑つてゐる」。そして「私は斯んな時に笑ふ女が嫌ひ」なのだ、「若い女の共通の点」として「御嬢さんも下らない事に能く笑ひたがる女」なのだ、と思ひめぐらす「先生」の不快な「顔色」を読んだ「御嬢さん」は、「一寸用があつて出たのだと真面目に答へ」なければならない（八十）。この場面で興味深いのは、「御嬢さん」の「真面目」な答えを聞いた「先生」が「下宿人の私にはそれ以上を問い詰める権利」がないと自覚していた点である。だがその自覚は、小石川の素人下宿ではすでに「下宿人の私は主人<sup>あるじ</sup>のやうなもので、肝心な御嬢さんは却つて食客<sup>めそうろう</sup>の地位にゐたと同じ事」だという転倒された現実の申し訳のやうなものでしかない（七十）。「食客<sup>めそうろう</sup>の地位」にいる「下宿人」であるはずの「先生」が「主人<sup>あるじ</sup>」のように「肝心な御嬢さん」の「笑ひ」を統制し、「真面目」な答えを強いる転倒された権力関係がこの場面に浮き彫りにされている。

こうした権力関係の転倒は、「先生」と「御嬢さん」の間のみならず、「先生」とKの間でも起きていた。遺書には、Kと「先生」という二人の男性が、ほぼ同時期に新潟の故郷との絆を失い、東京での都市生活者となる過程が描かれている。まず、医学を修めろという養家の要求に背いて文科大学に進学し、養家に黙っていたKは、とうとう「自分の詐を白状」して養家から本家に「復籍」していた上、本家からも「勘当」され（七五）、「約一年半の間」「独力で己を支えて行つた」（七六）。一方、その「約一年半の間」「先生」は、叔父に裏切られ、故郷と繋がる感情的な価値を「凡て金の形に変へ」、それを日清戦後の殖産興業期における金融資本の中に投げ込み、元金を取り崩さずに、その「利子」の「半分」だけでも暮らして行ける「余裕」を手に入れ（六三）、小石川の素人下宿の「主人<sup>あるじ</sup>」という倒錯した「位置」に身を置くことになる。そうして「たゞ学問が自分の目的ではない」（六六）と言いながら、親のみならず「友達の保護」も退けて「自活」（七五）しながら「意思の力を養つて強い人間」になろうとするKを、「一所に向上の路を辿つて行きたい」（七六）という言葉で誤魔化して素人下宿に連れ込んだのである。

重要なのは、「月々の費用を金の形で」Kの「前に並べて見せる」代わりに「二人前の食料を彼の知らない間にそつと奥さんの手に渡」（七七）すことで、「先生」がKの「自活」を密

かに取り崩していた点である。Kの「目的」が単に「学問」だけではなく「自活」による「向上の路」を辿ることにあったとすれば、「先生」の貨幣資本から出る「利子」による生活は、すでにKを「食客」<sup>めそうろう</sup>同然にしてしまっている。遺書の後半に「職業を求めないで差し支へない境遇」により「先生」自身が「スポイルされた」(百六)と書き記していることになぞって言えば、「自活」という「向上の路」から降り、利子生活者の「食客」<sup>めそうろう</sup>となったKの「境遇」は、「先生」の誘いに応じることで「スポイルされた」と言えよう。

ここから「御嬢さん」への「恋」に対する「公平な批評」(九四)を求めたKに「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と二度も繰り返し言い渡す「先生」の「策略」(九五)の構造が明らかに見えてくる。もとより「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉は、「先生」とは「向上の路」を共に歩む者同士であると信じていた「真面目」(九一)なKが、すでに自分が「先生」の金銭の力で「スポイルされ」ていることに気づかずに投げかけた言葉である。ここでKの「真面目」さは「先生」の手に一枚の「要塞の地図」を渡してしまっている。「慾を離れた恋そのものでも道の妨害になる」(九五)と言っていたKが「恋愛の淵に陥つた」(九四)のみならず、「利子」に「スポイルされた」生活を嘗め、「自活生活」もできなくなった以上、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉を発する資格などもとよりなかったことを、「先生」は「主人」として「食客」であるKに残酷に確認させていたのだ。

すでに述べたように、小石川の素人下宿における人間たちの関係性の中には、「真面目」さと「笑談」及び「笑ひ」をめぐる異質的な言語ゲームが交差している。「真面目」な発話が、発話された内容が真実であることを相手と自分に同時に強制する権力的な言語行為であるならば、「笑談」は発話された内容が真実ではないことを自分と相手が同時に信じ合える濃密な関係性の中で可能になる投機的な言語行為である。しかし「真面目」な発話の強迫的な権力性も「笑談」のやりとりには巻き込まれる場合、相手との信頼関係の中でその「真面目」さによる強迫的な遂行性を宙づりにしなければならない。もしそうしなければ、今度は相手との信頼関係の方が宙づりになってしまうからだ。そうだとすると、相手との信頼関係を宙づりにしたまま「真面目」な発話をした「先生」は、本当の意味での「策略家」であると言うしかない。

ここで素人下宿が「真面目」な発話をする二人の男性に、それぞれ「笑ひ」と「笑談」による言語ゲームを学習させる場でもあったことには注意する必要がある。事実、「笑談」と「笑ひ」の言語ゲームに先に巻き込まれたのは「先生」の方である。信頼していた故郷の叔父か

ら父の遺産を横領された「淋し」さという感情の「角が取れた」(七八)のは、「奥さんとも御嬢さんとも笑談を云ふやうに」(六七)になってからである。しかし「奥さん」が「決して子供ではなかつた」「御嬢さん」(六七)を「叔父と同じやうな意味で」「接近させやうと努める」「狡猾な策略家」(六九)ではないかと疑うようになった「先生」は、この信頼関係を下宿に連れ込んだKの眼を通して改めて確認しようとしたのである。

従って「奥さん」と「御嬢さん」が「策略家」であるという疑惑が晴れたのは、「御嬢さん」が「笑ひながら又何か六づかしい事を考へてゐるのだらう」(九二)とKに「笑談」を話すようになり、それに応答してKの胸に「御嬢さんに対する切ない恋」が芽生えていたことを「先生」が確認した瞬間であるに違いない。「先生」が「真面目」だと評価していたKが、「御嬢さん」ならではの言語ゲームである「笑ひ」と「笑談」の中に巻き込まれて行っていることが明らかであるからである。しかし「先生」は、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ち、Kを「真面目」な言語ゲームに送り返してしまう。その意味で「策略」は、「笑ひ」と「笑談」による言語ゲームではなく、「食客」に対する「主人」の「真面目」な発話による言語ゲームの中にあつたのだ。

### 3. 「笑ひ」と「笑談」による言語ゲーム

「先生」と「静」の関係の中で様々な形で現れる「真面目」さと「笑ひ」と「笑談」をめぐる言語ゲームは、どのように拮抗しながら、読者の解釈枠組を形成させていくのか。本節では、「静」の「笑ひ」と「笑談」が、遺書と手記の中にそれぞれどのように書き記されているのかを検討したい。まず遺書の中に描かれた「御嬢さん」時代の「静」と結婚した後の「静」の「笑ひ」と「笑談」をそれぞれ検討したうえ、「私」の手記の中に描かれた「静」の「笑ひ」と「笑談」を検討することにしよう。

まず「御嬢さん」が「笑ひ」と「笑談」による発話をするのは、どのような場合であり、「先生」はそれをどのように記しているのか。小石川の富坂を降りる途中、Kと共に坂を登る「御嬢さん」に出くわした「先生」は、その日の夜、Kと「一所に出たのか」と「御嬢さん」に尋ねていた。すると「御嬢さんは私の嫌ひな例の笑ひ方」をしては「何処へ行つたか中でゝ見ろと仕舞に云ふのです」と記述した上、「さう不真面目に若い女から取り扱はれると腹が立ちました」と当時の感情を回想する。「先生」は「それをKに対する私の嫉妬に帰して可いものか、

又は私に対する御嬢さんの技巧と見做して然るべきものか」についての当時の「迷ひ」を記し、「私は今でも決して其時の私の嫉妬を打ち消す気はありません」と書いている（八八）。

ここで以下のことが分かる。まず、「御嬢さん」の発話は「笑ひ」と共に開始され「笑談」に流れる。その「笑ひ」が「嫌ひ」な「先生」は「御嬢さん」との間の「笑談」のやりとりができない。「私は笑ひながらさつき何故逃げたんですと聞けるやうな捌けた男ではありません」（八六）という記述は、その有力な根拠であろう。そして「笑ひ」と「笑談」がセットになっている「御嬢さん」の発話が「技巧」ではないかという「其時」の「疑い」を「先生」は「今」なお持っている。このように「笑ひ」と「笑談」からなる「若い女」の発話を「不真面目」であると咎める「先生」の普段の言葉や態度は、つねに「御嬢さん」に「真面目」な発話を強いていると言える。重要なのは、こうした「真面目」な言語ゲームと「笑談」および「笑ひ」による言語ゲームの拮抗関係が、次の引用箇所にもみられるように、結婚後の先生と「静」の対話の中でも依然として現れていることである。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は<sup>あから</sup>明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした<sup>からか</sup>が、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戲ひました。（百九）

遺書の中で、「先生」が「妻の笑談」に導かれて「殉死」という「古い不要な言葉に新しい意義を盛り得た」（百十）と述べられていることに注目すれば、遺書はあたかも「静」の「笑談」が「先生」を自殺に誘ったかのように書き記していると言えるだろう。内田道雄はこの引用箇所における「静」の言葉を「不可解かつ呪術的」な「殉死懲遁のことば」だと解釈している<sup>(13)</sup>。では、遺書を読む「静」も「殉死」という言葉を夫に想起させ、その自殺のきっかけを与えてしまったという自己認識に陥るのではあるまいか。

しかし、引用箇所の中で「殉死」という言葉は、「明治天皇が崩御」したにも拘わらず「明治の影響を受けた私ども」が「生き残つてゐる」のが「時勢遅れだ」という「先生」の科白の中にすでに含意されていることに注意する必要がある。その「遅れ」を取り返す方法は、(後

---

(13) 内田道雄『『こゝろ』再考』『古典と現代』  
(一九八八年九月)。

に明治天皇の大葬日に乃木希典がそうしたような)、「殉死」以外には思いつかないはずだ。では、そのような含意を持つ言葉を発してしまった瞬間、「先生」はすでに「殉死」という言葉を「静」に発話させていたというべきではあるまいか。

だが、引用箇所「妻は笑って取り合ひません」とあるように、すでに「先生」自らが含意したにも拘わらず思い出せずにいる。では、すでに含意されている「殉死」を「笑談」として「調戯ひ」ながら答える以外には、「静」にいかなる選択も許されていないはずだ。ただし、「静」の発話は、「殉死」という言葉を「笑ひ」と「笑談」として脱文脈化しようとしているのだ。重要なのは、それにも拘らず「妻に向つて」「明治の精神に殉死する積だと答へ」た「先生」が、たとえ「妻に向つて」いたとはいえ、「殉死」という言葉が出現すべき文脈を自ら作り上げ、それに対して「殉死」と答える、自問自答の堂々巡りの中にいたに過ぎないことである。

しかし、「先生」がその答えである「殉死」を「静」に発話させてしまった以上、「先生」に自殺された「静」は、そのときの自らの答えをつねに考えなければならないはずである。その意味で、たとえ無意識的であれ、「先生」は「静」を自分の自殺に一定部分巻き込んでしまっているわけである。そして引用箇所における「先生」の書き方が、内田が指摘しているように「不可解かつ呪術的」な「殉死懲遷の言葉」の如く聞こえてしまう以上、「静」が遺書を読むことを禁じた「先生」の遺志は一理あると言えなくもない。だが、引用箇所に現れているのは、「真面目」な「主人」の言語ゲームが「笑ひ」と「笑談」の言語ゲームによる意味の変奏を許さないということである。「主人」の「真面目」な言語ゲームに他ならぬ遺書の中に「笑ひ」のエネルギーを奪われた形で記された「妻の笑談」が不気味に聞こえるのはそのためでもある。

だが「先生の遺書」の読者が、必ずしも「先生」の遺書の中で「真面目」に再文脈化された「妻の笑談」に肯ふとばかりは言えまい。なぜなら「真面目だから」という理由で遺書の第一読者とさせられた「私」が、手記の中に次のように夫婦の間の対話を記しているからである。

「静、おれが死んだら此家を御前に遣らう」／奥さんは笑ひ出した。／「序に地面も下さいよ」／「地面は他のものだから仕方がない。其代わりおれの持つてるものは皆な御前に遣るよ」／「何うも有難う。けれども横文字の本なんか貰つても仕様がないわね」／「古本屋に売るさ」／「売ればいくら位になつて」(三五)

「先生」の遺書に対して「私」の手記は、夫婦の間でやりとりされる「笑ひ」と「笑談」による会話に文脈を与えて再現してみせる。「おれが死んだら」と言いながら自分の自殺を仄めかす「先生」の発話は、その後続する発話に照らしてみると、「真面目」なものであったと言えよう。「先生」の同じ言葉を「何遍」(同)も聞いてきた「静」は、「笑ひ出し」ながらその「真面目」な発話に歯止めをかける。それから「序に地面も下さいよ」という明らかな「笑談」を口にする。すなわち、「先生」の「嫉妬」の感情が「今」も有効であるように、「静」の発話の構造も「御嬢さん」時代のそれと変わってはいない。

ここで、「真面目」なはずの「先生」の発話が、「静」が仕掛けた「笑談」のやりとりに巻き込まれることで、モノログとしては「真面目」さを維持しながら、ダイアログとしては「笑談」に近づいていることを見逃してはならない。前節で述べたように、「笑談」は相手との信頼関係に基づいた投機的な発話行為に違えば、「静」が「御嬢さん」時代から「今」に至るまで求めてきたものは、「笑ひ」と「笑談」のやりとりが可能になる信頼関係であると言えよう。その意味で「静」は、「御嬢さん」時代から「今」に至るまで何ら変わりのないにも拘わらず、長い年月「先生」との関係回復を待ち受けながら、「笑ひ」と「笑談」による言語ゲームに「先生」を誘いつつあったことが見えてくる<sup>(14)</sup>。

手記の書き手「私」は、「無論笑談らしい軽味を帯びた口調ではあつたが」「先生の話」は「其死」を「必ず奥さんの前に起るものと仮定」(三五)していたと書き記している。つまり、「私」は「先生」が「笑談らしい軽味を帯びた口調」で「真面目」に相手を愚弄する「主人」の言語ゲームが行われる現場を目睹していたわけである。ここで「先生の遺書」の読者は、「先生」の遺書における「妻の笑談」をどう読むべきかについての決定的な解釈枠組を手に入れることになる。ここで、新しい問題が提起されて来るだろう。「あなたは真面目だから」(五六)という理由で「先生」の遺書の宛先となった「私」は、「先生」の権力的な言語行為としての「真面目」な言語ゲームの規則を手記の執筆時である「今」もなお共有している者であるのか。「今」の「私」は、むしろ「静」の「笑ひ」と「笑談」による言語ゲームを明瞭に理解している者ではあるまいか。そして「先生の遺書」という手記を執筆している「今」、「私」は「静」に、夫を自殺させてしまったという自己認識をもたらしてしまいかねない「妻の笑談」を読むための解釈

---

(14) 田口律男は「笑ひとは、ある意味で常識的・規範的な言分けの走査線が無効化するものであり、もしそれに身体を同調させれば、言葉よりはるかに濃密なコミュニケーションを可能にするはずのものであった」が「言語の〈牢屋〉に囚われた先生の委縮した心を遂に溶解させるも

のではなかった」と本論と類似した指摘をしている。(『漱石研究』一九九六年五月)。

枠組を手記の中に組織化している。では、「先生の遺書」の読者は、「先生」が遺書の終わりで「参考に供する」と言った「他」としての読者だけなのか。もちろん「他」である者として「先生の遺書」を読者は読むだろう。だが、「妻の笑談」を読むための解釈枠組を手に入れた読者は、「先生の遺書」を書いている「今」の「私」と「今でもそれを知らずにいる」「静」との間における応答関係を強く喚起するだろう。手記「先生の遺書」の読者の役割を担う読者は、「先生」の遺書が仄めかす「静」の死を否定して、生きている「静」の〈今〉を生成させるようになる。

#### 4. 「私」の「批評」はどこに向けられるのか

以上の考察から明らかになるのは、「先生」の「真面目」な「主人」の言語ゲームによって抑圧された「静」の「笑ひ」と「笑談」による言語ゲームを再現してみせている「私」の手記が、「静」が読者として手記「先生の遺書」を読むことをすでにつねに想定していることに他ならない<sup>(15)</sup>。そしてそれは「私」が、手記執筆中の「今」まで「先生」亡き後の「静」の生に立ち会ってきた存在であることを意味する。そのような意味作用が可能になるために、読者は「先生の遺書」という手記の読者の役割を担わなければならない。それは小説の終わりで「先生」の遺書の読者としていちおう位置づけられた読者が、本稿の第一節で述べたように、三段階の表記行為を読み取り、みずから『心』の副題でもある「先生の遺書」の読者として位置づけることで可能になる。

一方、本稿と同様に『心』が『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に発表されたことに注目した三好行雄は、「先生の遺書」の読者が「時間に添って物語を読みとっていくことになる」「不特定の読者」であると注意しながら、「私」の手記は、「不特定の読者にむかって」「やがて公表されるはずの遺書のための伏線」を張っているに過ぎないと述べている。三好は、「先生の遺書」の「受け手である奥さんの心情」を考えるなら、「静」が「先生の遺書」の読者である可能性は排除されるべきであると述べ、「奥さんは乃木静子が将軍に殉じたように、夫の死を知ったとき（たとえ先生の意図したように、それを病死だと信じたとしても）、みずから死を選んだ」と解釈する<sup>(16)</sup>。ここで三好が言う「不特定の読者」とは、「静」を除いた「他」としての読者、すなわち「先生」の遺書の読者と変わらないのは言うまでもない。要するに、

(15) 小森陽一は、「先生から遺書を受け取った後の『私』が、誰かに向かって書いていることが明示されている」のが、手記「先生の遺書」であると述べ、その虚構の発信者である「私」が「明示されない何者かにむかって自らの過去（先生とのかかわり）をめぐる言葉を紡ぎ始め」と述べて、最終的に「私」は「遺書の言葉を一字一句写しながら」「先生の過去」が書き記された遺

書を「静」に「明らかにする」のだと指摘している（「このころの行方」『成城国文学』一九八七年三月）。

(16) 三好行雄「ワトソンは背信者か」『文学』（一九八八年五月）。

三好が言う新聞連載の読者とは「先生」の遺書の読者と同質的である一方、手記「先生の遺書」の読者の役割を担おうとはしないのだ。

しかし「私」の手記の部分は、本当に単なる「伏線」に過ぎないのか。連載九回、「私」が先生の家玄関前で「時々高まつて来る男の方の声」と「先生よりも低い音」の「奥さんらしく感じられ」る声の「言逆ひ」を聞いたある日のことが記されている。そしてその晩「私」の下宿を訪ねてきた「先生」が残した「私達は最も幸福に生まれた人間の一对になるべき筈です」という「最後の一句」の「異様」さを「細君の為に」という言葉のために忘れ、「安心して寝る事が出来た」と記している。手記の部分におけるこの場面を記憶している読者ならば、「私は時々妻から何故そんなに考へてゐるのだとか、何か気に入らない事があるのだらうとかいふ詰問を受けました。笑つて済ませる時はそれで差し支えないのですが、時によると、妻の癪も高じて来ます。しまひには『あなたは私を嫌つてゐらつしやるでせう』とか、『何でも私に隠してゐらつしやる事があるに違ひない』とかいふ怨言も聞かなくてはなりません。私は其度に苦しましました」と記された遺書の部分に当たる百六回を読みながら、手記の中に記されていた「静」の「低い声」を喚起せざるを得ないだろう。

さらに遺書の中に当たる百七回に記されている「貴方は此頃人間が違つた」、「Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう」という「静」の科白を読む読者は、手記の部分に当たる連載二十回で、当時はそれほど「重く見てゐなかつた」「当夜の会話」を喚起することになろう。遺書に記されている「静」の言葉は、手記の部分に当たる連載十九回で「其晩」、「人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに変化できるもの」なのか、「私はそれが知りたくて堪らない」、「だから其所を一つ貴方に判断して頂きたい」と「私」に訴えかけていた「静」の言葉とびつたり重なっているからである。重要なのは、「私は其晩の事を記憶のうちから引き抜いて此所へ詳しく書いた。是は書く丈の必要があるから書いた」（二十）と書いてあることである。では、その「必要」はどこから生じてくるのか。

本論文はすでに、存命中の「静」の「記憶」が必ずしも「純白」とは言えないことを手記の部分を挙げながら論じたが、遺書の部分に当たる百八回にある「妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました」という「先生」の記述からも「静」が過去の事件についての、ある程度の自覚を有していることが窺われよう。だとすれば、「静」の問い掛けに応答しようとする「私」の試みの背景から、ある重苦しい風景が

現れてくる。すなわち手記の部分で「其所を一つ貴方に判断して頂きたい」と言っていた「静」は、実はすでに「自分の過去を振り返って眺め」ていたのである。「当夜の会話」について「私」が「書く丈の必要」を自覚したのは、「当夜の会話」がその後も繰り返された複数回の「会話」の原型に当たるからではないだろうか。

揺れる列車の中で遺書を読み、東京に着いたその足で先生の家に向かい、そこで「静」に会った「私」は、遺書の終わりの部分に書いてある禁止に従うために、「静」にその遺書を隠さなければならなかったはずである。手記を書いている「今」に至るまでの「私」は、「先生」の禁止に服従しながら「静」に遺書の内容を秘匿した者であるのだ。だとすれば、「当夜の会話」で「私の判断は寧ろ否定の方に傾いてゐた」と書き記していることから窺われるように、すでに遺書を読んだにも拘わらず、「それ」が言えない「私」は、「静」の繰り返される問い掛けに対して、否定か肯定かの言葉しか返せずじまいに違いない。それ以上のことを言うとは「先生」の禁止に背くことになるからである。では「真面目」な「教訓」の伝授を標榜する「先生」の遺書の呪縛は、「私」を、「何うぞ打ち明けて下さい」（十八）と頼む「静」に「何事も説明」（百七）できなかった「先生」のように、もう一人の悲惨な人間にしていたのではあるまいか。このように「先生」の死後における「静」とのやりとりの延長線の上で遺書が公開されている以上、手記を書いている「今」の「私」は、「先生」の禁止を超え、「静」との新しい言語ゲームの規則を形成させ、「静」の「記憶」の変更に挑んでいると言えよう。これまで「静」策略家説の最も重要な根拠として挙げられてきた、「其晩の事」を総括でもある次の箇所は、ここで読み直されなければならない。

先生は寧ろ機嫌がよかつた。然し奥さんの調子は更によかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうち溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶してゐる私に、其変化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかつたならば、(実際それは詐りとも思へなかつたが)、今迄の奥さんの訴へは感傷を弄ぶためにとくに私に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかつた。尤も其時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかつた。私は奥さんの態度が急に輝いて來たのを見て、寧ろ安心した。是ならばさう心配する必要もなかつたんだと考へ直した。(二十)

Kの死について知っていることを話しながら「私」の判断を乞おうとした「静」は、「先生」が帰宅すると「急に今迄の凡てを忘れたやうに」「格子を開ける先生を殆んど出合頭に迎へ」（二十）に出てしまい、引用箇所にあるように「急に輝いて来た」のである。もし「私」が「今」それまでの「静」の「訴へは感傷を弄ぶためにとくに私に拵えた、徒らな女性の遊戯」であると「静」を「批評的に見」ていたのだとすれば、「今」の「私」は、「静」を「かつての先生と同じく静を遊戯を弄ぶ女性として批評的に」見ながら、「静」が「一方的にまなざされ、意味づけられ、そして排除され」るようにする「先生と同類」の男たちの一人に過ぎなくなってしまう<sup>(17)</sup>。そしてその「同類」の男たちによる手記と遺書を立て続けに読むことになる「静」は、「一切の人間の連帯が断ち切られた空漠たる虚無の空間」において「死ぬしかない」<sup>(18)</sup>かも知れない。

しかしすでに前節でみてきたように「私」の手記は、「先生」の「真面目」な発話による言語ゲームの規則を共有せず、「笑ひ」と「笑談」による言語ゲームに再文脈化することで、「先生」に「殉死懲遁の言葉」を投げかけたという「静」の嫌疑に決定的な反論を提出していた。しかも「当夜の会話」における「静」の問い掛けが「先生」の遺書にも記されている以上、「今迄」の「静」の話が「詐りでなかつた」ことは確かである。さらに言えば、「静」が存命中であるにも拘わらず遺書が公表されていることは、すでに「私」が「先生」の禁止の彼方にいる証明でもある。

ならば、「私」の「批評」は、「今」までの自分と同じく「先生」の禁止を超えることができなかった、かつての「静」に向けられていると言うべきであろう。引用箇所の直前で「私」は、「事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れてゐなかつた」、「知れてゐる所でも悉皆は私に話すことが出来なかつた」（二十）と記し、「それつ切りしか云えない」、「みんな云ふと叱られるから」、「それも云はない事になつてゐるから云ひません」という「静」の言葉を書き記している（十九）。「先生」が「静」に第三者に言つてはならないという禁止を課していたことが明らかに見えてきている。「先生」の死後から「今」に至るまで、「先生」の遺書を「静」に公開してはならぬという「先生」の禁止を守り通す苦しみの中、一方では繰り返して遺書を読んできた「私」に、事態は明瞭にみえてきたはずである。「先生」に自殺された者同士が打ち解けて話し合わなければ悲惨な苦しみは永遠に続くしかない。「其晩」、真実を求めてい

---

(17) 押野武志「静は果たして知っていたのか」石原千秋編『夏目漱石『こころ』をどう読むか』（河出書房新社、二〇一四年）。

(18) 西垣勤、前掲論文。

た「静」が、「先生」が帰宅するやあっさりとその試みを諦めたかのように振る舞わなかったならば、「先生」が封印した「事件の真相」についての対話が、第三者である「私」にまで開かれる可能性があったのではないだろうか。「云はない事になつてゐる」「それ」を言おうとした「眼のうちに溜まつた涙」を隠し、彼女に果たされた「先生」の禁止に服従した「静」の態度は、実は「先生」に「拵えた」「詐り」ではなかったのか。

「私」が「物足なさそうな顔」で「先生」に「過去を絵巻物のやうに」「展開して呉れと逼つた」のは、「静」との「当夜の会話」が交わされた「秋」の翌年に当たる「初夏」のことである(五六)。遺書の中で「先生」は、そのとき「私はまだ生きてゐた」、「死ぬのが厭であつた」(同)と書き記している。この場面で「あなたは本当に真面目ですか」と「先生」が問い、「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です」と答える、「真面目」な発話をめぐる言語ゲームの規則が、二人の男の間に共有されたことが明示されている。もし「静」が「云はない事になつてゐる」「それ」を言ってくれたなら、すでにこのときから第三者である「私」を含む形で三人の間で新しい言語ゲームが芽生えてきたかも知れない。

## 終わりに

以上のように、「先生の遺書」の中に組み込まれている読者としての役割を担わされた『心』の読者の眼の前にみえてくるのは、亡き「先生」の遺書をめぐり、残された二人である「静」と「私」の間に芽生えてくる新しい言語ゲームであると言えよう。「先生」の死後に「静」の生に立ち会う「私」は、何も知らずに臨んだ「当夜の会話」とは違い、「先生」の遺書を秘匿しながら「静」の問い掛けに立ち向かわなければならなかったはずだ。「私」の手記の言葉は、それまで答えることができなかった「静」の問い掛けに対する応答として生成されていたのだ。『心』を読み終え、次の「短編」への期待を裏切られた読者の意識における空白の中で生成されるのは、「先生の遺書」という手記の形で「先生」の遺書をコンテクストとして共有した「私」と「静」の間における新しい言語ゲームが芽生えてくる〈今〉にほかならない。新聞連載小説としての『心』が作者「漱石」の契約違反で作り出した空白は、新しい〈今〉が生成される場でもあるのだ。